

えいらい

No.14

平成24年11月発行

発行元/財団法人永頼会 松山市民病院



〒790-0067 愛媛県松山市大手町2丁目6-5 TEL / 089-943-1151 FAX / 089-947-0026

発行責任者/院長 山本祐司 編集/松山市民病院広報委員会

次の時代に備える



副院長 水上 祐治

松山市民病院は、地元の有志75名が発起人となり昭和31年(1956年)に設立され、病床数32でスタートしました。この中で先頭に立ち最も尽力されたのが当時愛媛県議会議員であった岡本博氏です。氏の伝記の中に次の文章を見つけました。

「市民病院は、名実ともに総合病院として確立された。昭和49年(1974年)3月には新館が完成。許可病床数508床の偉容を誇る大病院にまで発展充実した。」

ここでいう新館が現在の南棟です。当時の南棟完成への喜びと当院への期待感があふれています。

それから50年近く経ち、昨年山本祐司院長がこの南棟の建て替えを決断され、今春工事が始まりました。先日、内科外来・ICU棟が取り壊され、南棟もその役目を終えようとしています。北棟・南棟の連絡通路を通る度に、病院の姿が少しずつ変わっていくのが分かります。平成13年、取得した隣のホテルを解体し更地にして、そこに内科外来棟・ICU棟が出来上がる様子を誇らしげに、この通路から眺められていた宮田信潔先生(現理事長)の姿を思い出します。

建設業界は新築工事件数が減少し、スクラップ&ビルドの時代から、ストック・リニューアルの時代に移行しました。古い建物の改築、改善に力を入れ、生き残りを図っています。

医療界の変化も著しく、仕事の進め方は変わりつつあります。病床数を誇る時代ではなくなりました。医療の質が問われ、患者さんの満足度、納得感に配慮した運営が求められます。

基幹病院には介護、終末期医療ではなく急性期、専門的医療が期待されています。患者さんを主治医だけで診るのではなく、多職種の医療者がいろいろな観点から関わるチーム医療が標準になりました。少し俯瞰すると、病気や病院という枠を超え健康全般に関する情報発信・相談機能を備えた、市民全体に安全と安心を提供する施設として取り組む余地がありそうです。

時代の変化は建物を変え、働き方を変えます。今必要とされている仕事内容がそのままずっと変わらないということはありません。一方で、今は気づいていないニーズが顕れてきます。3年後、南棟は免震構造を有し、情報通信設備を装備した立派な建物に変身します。当院のフラグシップ(flagship)として今後50年以上、市民への医療提供を支えてくれることとなります。

新しい器に、中身は相応しくなっているか。次は私たちの番です。今のうちから次の時代を意識しておきましょう。当院で働く職員全員が、研修、診療を通じて個人の能力を高め、新しい技能を身につけ、力を合わせていきましょう。それが新しい時代に対応できる病院につながるものと思います。